九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国語入門教育におけるプロジェクト型学習の導入について ： 能動的な学びによる学習意欲向上を目指して

李, 大年
九州大学基幹教育院 ： 非常勤講師

https://doi.org/10.15017/1799327

出版情報：基幹教育紀要. 3, pp.79-96, 2017-03-28. Faculty of Arts and Science, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

中国語入門教育におけるプロジェクト型学習の導入について 能動的な学びによる学習意欲向上を目指して

李 大年

九州大学基幹教育院 非常勤講師, 〒819-0395 福岡市西区元岡 744

Introduction of project based learning in beginners' Chinese classes Aiming to enhance learning motivation by active learning

Danian LI

Faculty of Arts and Science, Kyushu University, Part-time Lecturer, 744, Motooka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

*E-mail:danianlijp@hotmail.com

Received Sept .30, 2016; Revised Nov.20, 2016; Accepted Dec. 1, 2016

In beginners' Chinese classes, the greatest emphasis is placed on developing pronunciation, vocabulary, grammar, and simple conversation skills. However, allowing students to perceive and learn about the world and culture within which the Chinese language has taken form is also highly important for enhancing learning motivation. In this article, we analyze a study on project based learning conducted in beginners' Chinese classes of Kyushu University in 2016, and discuss the problems and future challenges in order to enhance students' learning motivation.

1. はじめに

ここ数年「学士力」、「社会人基礎力」、「21 世紀型スキル」と次々と言われるようになった[i]。大学生が社会に出る際に重要視されるのはリーダーシップ、コミュニケーション能力、協働力などがある。大学の学びにおいても、一般教養・専門分野の学習の他に、考える力、問題解決力、協働力が求められる。

1 年次に学ばれる初修中国語はほとんどの学習者にとって初めて学習する言語であるため、初修中国語授業では、発音・語彙・文法・日常会話などの習得が重要な課題である。しかし、文化的な背景と切り離された言語知識を受動的に学ぶだけでは十分であるとは言えない。中国語の背景にある文化を知り、それに触れることで、中国語に関する理解が深まり、並びに学習意欲向上に繋がると思われる。

九州大学でも「自主的な学習を充実させよう」、「仲間とともに学ぶことを大切にしよう」などアクティブ・ラーニングへの関心が高まっている[ii]。アクティブ・ラーニングの中でもプロジェクト型学習は社会のニーズに応える能力を培う方法として注目されている。プロジェクト型学習では、学習者が一定の目標を達成するために能動的に取り組み、協力して問題を解決することで、実践的

Bulletin of KIKAN Education, Vol. 3, 2017
© 2017 Faculty of Arts and Science, Kyushu University

問題解決力を鍛えることができると言われている。

初修中国語授業においても発音、語彙、文法、会話を学習する上に、学習者の協働力、問題解決力の育成を重視するべきである。その学習の場として、プロジェクト型学習は最適の機会を与えてくれる。ここで、プロジェクト型学習による能動的な学びをどう教科書を用いた通常の授業と関連づけるかが問題になる。

本稿では、学生の学習意欲向上のために、筆者が 2016 年度九州大学初級中国語授業において実施したプロジェクト型学習について分析・考察し、その結果について報告する。

2. プロジェクト型学習とは

プロジェクト型学習は、学習者の能動的な学習を中心に、問題解決の中で学習を進める実践形式の学習方法で、一般的には PBL と呼ばれることが多い。PBL は、Project Based Learning の略称であり、日本語では「プロジェクト型学習（Project-Based Learning）」や「問題解決型授業（Problem-Based Learning）」などと訳されている。

長年に亘ってプロジェクト学習を積極的に正課授業・課外活動に導入し、推進してきた同志社大学PBL推進支援センターでは、「一定期間内に一定の目標を実現するために、自律的・主体的に学生が自ら発見した課題に取り組み、それを解決しようとチームで協働して取り組んでいく、創造的・社会的な学び」と定義している[iii]。

また、會澤[1]は、「あるプロジェクトの達成に向けて、チームが一定期間に協働しながらゴール到達に向かう主体的・創造的学習」と定義している。

本稿では、以上のような定義を援用し、プロジェクト型学習を「一定期間内に一定の目標を達成するために、学生が能動的に課題に取り組み、問題を解決していく体験を通じて問題解決能力を身につける協働学習」と定義する。

3. 外国語授業におけるプロジェクト型学習の進め方

外国語授業におけるプロジェクト型学習の特徴をみると、西村[7]は、第 2 言語として英語教育におけるプロジェクト型学習を（1）学習者が主体性・自立性を発揮する取り組みを中心としている。（2）明確な目的を持つプロジェクトを完成させる。（3）プロジェクトへの取り組みの課程で、問題解決能力、批判的思考力、学習についてのメタ認知が養成される。（4）課題のテーマについての知識を深めること、並びに目標言語の習得を促進することを究極の目的とする。（5）入念に組み立てられた一連のタスクがあり、学生は多面的な言語技能を用いる諸活動を行う。（6）そのタスクに取り組む間、学生は情報の収集・処理・報告を活発に行うなど六つの要件を満たす学習だと述べている。

當作・中野[6]では、外国語授業におけるプロジェクト型学習は、言語だけではなく、言語の背景にある文化も学習対象とし、言語・文化領域の「わかる」、「できる」、「つながる」力を身につけることを目指していると記述している。つまり、プロジェクト型学習は、グループで課題を設定、計画、調査、交流しながら学習が深まっていく過程であることがわかる。また、當作・中野[6]では、

具体的に以下の七つの段階で作業を進めることを提案している。

①課題・課題の設定：
学習者が自分にとって身近で関心のある事柄や 21 世紀のグローバル社会にとって重要な話題や課題などを決める。
②計画・準備：プロジェクトの概要を計画し、設定した話題・課題の内容について話したり、書いたり、議論したりするために必要な語彙、表現を習得・復習するほか、必要な文化知識、背景知識を確認してプロジェクトの準備をする。
③調査・研究：学習対象言語や母語を使ってインターネットや書籍などから情報を収集・調査し、問題解決のための分析や評価をする。このなかで、高度思考力や情報活用力を身につけることができる。
④作業：プロジェクトの最終段階の活動（たとえば交流）のための準備を続ける。ペア、グループ活動を行い異なる意見を調整するなかで協働力を身につけることができる。
⑤交流/社会に貢献する活動：学習している言語を使ってさまざまな背景をもつ人びとと交流したり、話題・課題について意見を交換したりする。教室外の人・モノ・情報と接することにより、さまざまな文化について知り、多文化的背景をもつ人とつきあう能力が養われる。
⑥発表：交流中、あるいは交流後の報告として、テクノロジーを使ってプレゼンテーションを行う。情報、テクノロジー、メディアのリテラシーを身につけることができる。
⑦評価：教師が活動をデザインする際にあらかじめ作っておいた評価を実施し、プロジェクトの目標の達成度を評価する。また、自己評価、グループ評価によって、学習者は、自律性、協働力などを内省、評価する。

今回のプロジェクト型学習では上記の参考文献の進め方を参考にして開始から終了まで、図 1 のように六つの段階に従い、作業を進めることにした。

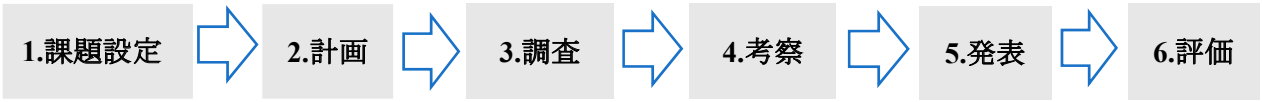

図 1　今回のプロジェクト型学習の進め方

4. プロジェクト型学習による中国語教育

4.1. 実施対象と目的

本章では、筆者が2016年度九州大学初級中国語授業において実施したプロジェクト型学習の流れや結果について報告したい。

上記科目は、初心者向けの授業で、中国語の発音、語彙と文法の習得を目的とした科目である。履修者は中国語に初めて接する初心者である。

今回のプロジェクト型学習は、2016年4月～2016年8月に行われた中国語Ⅰの科目で実施し、毎週火曜日と金曜日の授業で行い、授業回数は火曜日15回、金曜日15回、合わせて30回である。受講生は本学の1年生117名で、工学部と医学部の学生が対象となっている。授業は2クラスに分けられ、クラスⅠは教師1名と学生59名、クラスⅡは教師1名と学生58名で授業を行った[iv]。

今回の実施目的は、教科書を用いた授業とプロジェクト型学習を関連づけることで、中国語の学習と中国との繋がりを実感させ、学習者が能動的に学ぶ授業を形作っていくことである。

4.2. 授業の流れ

今回のプロジェクト型学習は、通常授業と並行して行い、第一回目の話し合いの時点から、5週間後に発表が始まり、各グループに分かれてプロジェクトの準備作業を進めていく。

授業の流れは以下の図2の通りである。

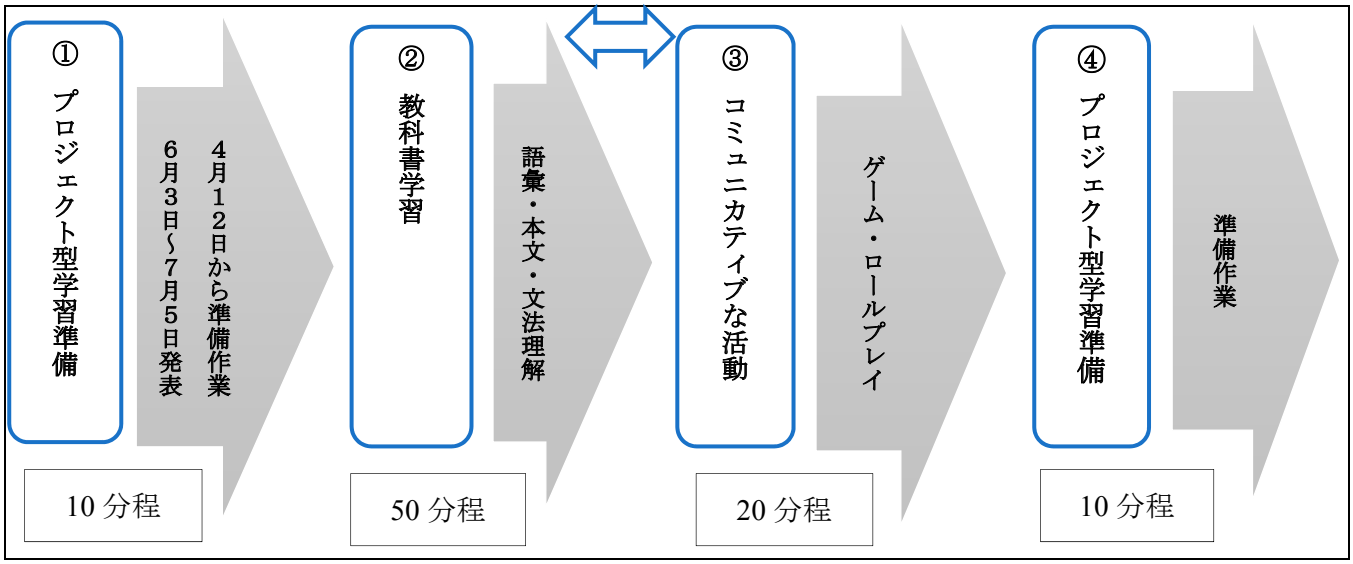

図 2　中国語Ⅰの授業の流れ

プロジェクトの準備作業とグループ発表は授業の前後の10分間を使って行い、それ以外の時間には教科書を用いた学習を行った。

前期の中国語学習の目当ては、中国語の発音をマスターすること、それから第1課から第6課までの語彙・会話文・文法を学習することである。教科書を用いた学習においてはペアワーク、グループワーク、調べ学習、シャドーイング、ディスカッション、コミュニカティブな活動などを取り組んだ[v]。

図2の②と③は前後する場合がある。文法項目の特徴に応じて「機能・文法理解・ドリル・コミュニカティブな活動」の順で授業を進める場合もあり、「コミュニカティブな活動・ドリル・文法理解・機能」の順に授業を展開する場合もある。

つまり、従来の授業を全面的に否定するのではなく、学習項目の特徴に応じて学習形態を選び、それぞれの良さを引き出すように授業を設計した。

4.3. 事前準備

4.3.1. プロジェクト型学習についての説明

該当クラスでは、プロジェクト型学習に慣れていない学生が多かったため、プロジェクト型学習活動を開始する前に今回のプロジェクト型学習の特徴やグループ活動の内容についてPowerPointを使って説明し、学習者に参加の意志を確認した。以下、その内容である。

①プロジェクト型学習は中国語に関して教室外での課題解決、言語活動の準備である。
②学習者は自己学習とグループでの協働学習を行う。
③教員は脇役的存在で、学習者による能動的学習、自己省察を促す。
④終了時の自己評価、グループ報告、教師のフィードバックによって、プロジェクトの目標の達成度を評価する。

4.3.2. プロジェクトの評価についての説明

プロジェクト型学習活動を開始する前に、学習者にプロジェクトに関する評価基準を説明し、参加の意思を確認した上、賛同を得た。

プロジェクトの成果に関しては、教員による評価と学習者による自己評価、グループ報告書によって行う。グループによる報告書の提出はプロジェクト準備の段階から終了時までの流れや授業外を含めたグループの活動へのメンバーの関わり方を知るためである。（資料1参照）教師の評価に関しては、良かったところや不足点、励ましを含めて教員から各グループにコメントを添えて学習者にフィードバックする。学生による自己評価は、プロジェクト終了時に行う。自己評価は、グループ活動について振り返り、自己省察を促すことを目的にする。（資料2参照）

4.3.3. グループ分け

グループ分けはくじ引きによって行い、各クラス 10 グループが形成された。1 グループの人数については、6 名以上の人数になると、役割分担が希薄になること、作業をしないメンバーが現れることなどの問題が生じる可能性が高くなることや人数が 2 名のグループでは、個人への作業負担が大きくなること、協働力を発揮しにくくなる可能性が生じることを配慮し、1 グループの人数を 4～6 名にした[vi]。グループメンバーの選定が終わったら、学習者にリーダーの選出など、グループ内での役割分担を決めてもらった。

4.4 課題設定

プロジェクト学習における課題設定には「教員が決定する場合」と「学生が自由に決定する場合」がある。教員が決定する場合は「教育機関側が目標とする教育を実施することができる」、「どのような開発を行うかを、学生が事前に知ることができる」、「事前に十分な準備を行うことができる」、「教員側も指導しやすく、教員の負担も少ない」、「テーマの決定に時間を費やすことがなくなり、開発に集中できる」、「学生が同じテーマで開発を行った方が比較評価しやすい。学生間の競争も起こりやすい」などの利点がある。

それに対して、学生が決定する場合は「学生が興味を持ったテーマで学習することができる」、「学生意欲的に取り組む」、「テーマの決定を通じて、学生の主体性が養われる」、「他チームの開発からも学ぶことができる」、「何が起こるか分からないが、その分学ぶことも多く、教育効果が高い」などの利点がある[vii]。

外国語教育でのプロジェクトとしては、目標言語を使って母語話者にインタビューを行うこと、手紙やeメール、テレビ電話などを使って母語話者と交流すること、新聞や動画、ラジオドラマを作成すること、教材開発、翻訳などのタスクが考えられる。また、歌や料理、写真、劇などを素材とした活動も考えられる。

しかし、このようなプロジェクトはある程度の言語能力を必要とし、初心者の場合は目標になかなか到達できないだろう。

以上のようなことを踏まえ、今回の取り組みでは、教師から「中国」という大きな枠組みの中で、興味のあるテーマを選定することを提案した。そして学習者に以下のようなことを指示した。

①グループで選んだ課題について調査・分析・考察を行い、プレゼンテーションを行う。
②得た情報の信憑性について再確認を行い、より正確な情報を求めようと努める。
③プレゼンテーション持ち時間は10分位である。
④使用言語は、特に定めないが、習った中国語の言葉や表現は活用する。

課題設定は、グループのメンバー同士での話し合いで決定し、目標設定、作業計画などすべての作業を学習者の能動的な活動のもとで行った。

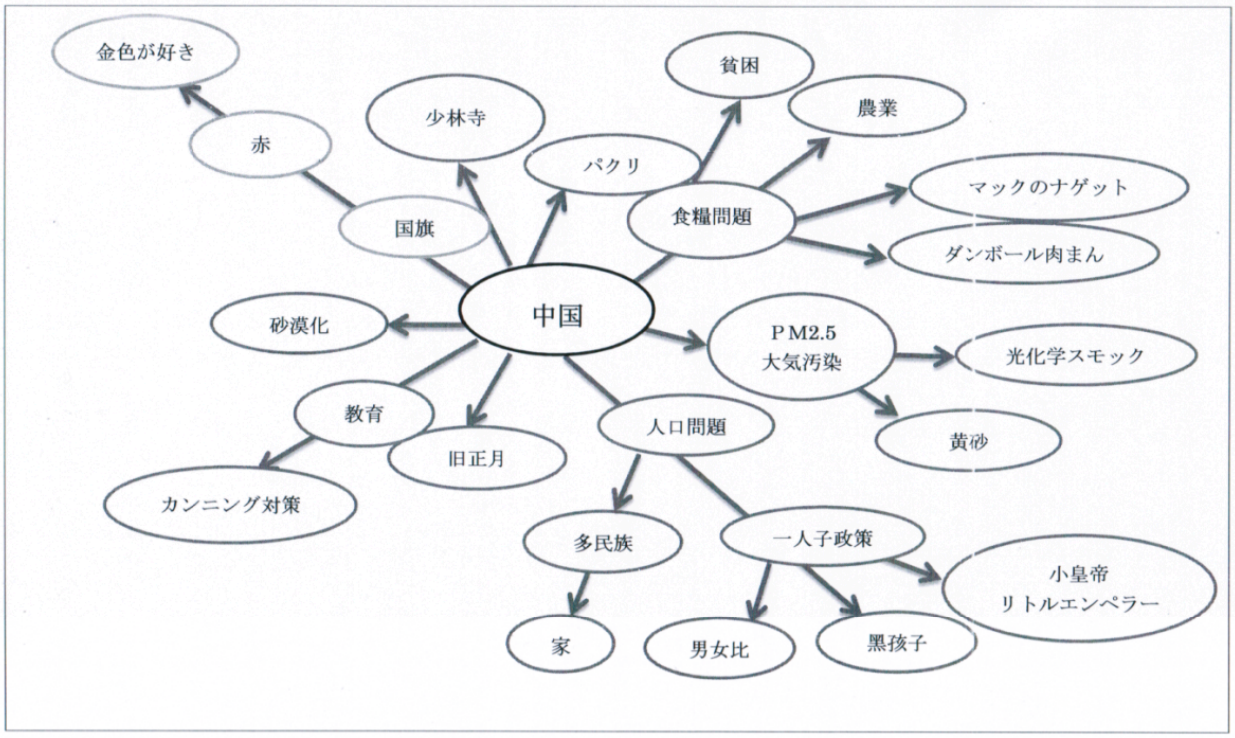

図 3　グループによる課題設定の例

図 3 は、今回の課題決定の際に学習者が実際に紙に書いたものである。このグループは「中国」をテーマに、いろいろなことを連想していたが、最後は「中国・国旗・赤・金色が好き」というキーワードから「中国の色について」という課題に辿り着いた。

4.5. 計画・調査・考察の様子

グループごとに、プロジェクトの概要を計画し、設定した課題の内容についてそれぞれの担当を決め、各々の種目について調べた。全般的にみると、インターネット、雑誌、書籍による情報を取捨選択し、必要な情報を集めた。それから、中国母語話者にインタビューをしたり、教室外の人と接したりして、得た情報の信憑性について再確認を行い、より正確な情報を求めようと努めた。

そして、調べたことをグループメンバー同士で話し合い、PowerPoint にまとめ、皆で共有し、発表の順番を決めた。また、授業前に集まってリハーサルをして時間配布を決めたり、お互いにアドバイスをしたりしてより良いプレゼンテーションを目指していた。

4.6. 結果報告

4.6.1. 各グループによる発表内容

5 週間の準備期間の後、2 クラス同時にプレゼンテーションを開始した。プレゼンテーションの使用時間は 10 分程度で、使用言語については、初心者であることを配慮し、特に定めていない。発表順番はくじ引きで決めた。以下の表 1 はクラス I の発表内容で、表 2 はクラス II の発表内容である。

内容からみると、中国の観光地、料理、スポーツ、歴史、文化、芸術など、さまざまな分野について触れていた。

プレゼンテーションの形式からみると、PowerPoint を使って発表を行うと同時に、グループで作った動画を見せたり、劇を披露したり、クイズを準備したりして場を盛り上げていた。また、プレゼンテーションに必要な小道具、実物、衣装を用意するなど、工夫が凝らされていて斬新な発表だった。

使用言語は、特に定めていないが、最初の段階では「北京（Běi jīng）」、「上海（Shàng hǎi）」などの地名や「你们好（nǐ men hǎo）」、「再见（zài jiàn）」などの挨拶用語程だったが、時間が経つにつれて中国語を使用する頻度が高くなっていて、習った表現を使おうとする意識が高まっていた。

発表終了後にアンケート調査表を配布し、より魅力的な「成果」を発表したグループを選んでもらい、良かったところをコメントとして記入してもらった。アンケート調査の結果は、全グループ発表終了後に PowerPoint を使って公表した。

学習者が選んだ一番良かったグループは、クラス I では「中国の色について」と「観光地－九寨溝とパンダの魅力－」をテーマとした発表で、クラス II では「中国旅行日記」と「成り立ちが変な漢字について」をテーマとした発表だった。

「中国の色について」をテーマとした発表を選んだ理由には「全く自分にはない着眼点だったから」、「赤や金色がもつイメージが中国と日本で非常に異なっていたことに驚いたから」などの感想

が寄せられた。
「観光地－九寨溝とパンダの魅力－」をテーマとした発表については「湖がきれいだったのが印象に残っている」、「行きたいと思ったから」、「行きたくなったから」、「中国旅行したいから」など、動画をみて実際に行きたくなったという感想が多く寄せられた。
「成り立ちが変な漢字について」をテーマとした発表は「見なれている漢字の成り立ちが衝撃的だったから」、「ユーモアがあってよかった」、「漢字の成り立ちが興味深いと思った」、「おもしろさの方向性のインパクトが強かった」、「日本にはない中国ならではの発想で出来た漢字にとても感心したから」など驚きの感想が多かった。
特に「中国旅行日記」は旅行日記という形式を取り入れ、有名な観光地について紹介したり、グループで作成した動画を使って小笼包を簡単に作る方法を紹介したり、クイズなど聴衆参加ができるイベントを準備したりして場を盛り上げた。
寄せられたコメントをみると、「中国旅行形式で発表していたところ」、「パワーポイントのクオリティが高かったし、何よりみんなが楽しめるような発表になっていた」、「料理の動画とか、写真の加工が上手だった」、「斬新だった」、「発想が良かったし、実際に料理をしていたので良かった」、「非常に発表内容が充実していておもしろかったから」、「動画を用いた発表は独自性があって印象に残っている」、「総合的にとても良かったと感じ、きちんと準備している印象を受けた」、「とても手の込んだスライドでとてもよかった。あと、小笼包がとてもおいしそうだった」、「工夫が凝らされていた」、「〇〇同学在哪儿？（〇〇tóng xué zài nǎr?）（〇〇さんを探せ）」が聴衆参加できるイベントで楽しめた」など、発表形式や内容について高く評価されていた。
要するに、内容とアイデアが斬新であったのと、動画やクイズ形式を使ったことで、最も印象的な発表だったことが、選ばれた要因であったと考えられる。

表 1　クラス I の発表内容

順番	班	クラス I	発表日時
1	8 班	中国の観光地について	2016/6/3（金）
2	4 班	中国のパクリ文化について	2016/6/7（火）
3	7 班	観光地－九寨溝とパンダの魅力－	2016/6/10（金）
4	3 班	三国志について	2016/6/14（火）
5	1 班	中国の色について	2016/6/17（金）
6	9 班	中国のスポーツ－視聴率から見るスポーツ－	2016/6/21（火）
7	2 班	中国のあれこれ－髪型・服装・文化・中華街	2016/6/24（金）
8	5 班	「蜀」について	2016/6/28（火）
9	10 班	中華料理のマナーについて	2016/7/1（金）
10	6 班	中国の武術について	2016/7/5（火）

表 2　クラスⅡの発表内容

順番	班	クラスⅡ	発表日時
1	9 班	成り立ちが変な漢字について	2016/6/3（金）
2	10 班	中国の観光地について	2016/6/7（火）
3	1 班	中国の映画について	2016/6/10（金）
4	7 班	中国と日本の違いについてーお金・挨拶・食事・宴会ー	2016/6/14（火）
5	3 班	中国の大気汚染・土壌汚染・水質汚染について	2016/6/17（金）
6	5 班	中国の祝日について	2016/6/21（火）
7	2 班	中国のスポーツについて	2016/6/24（金）
8	4 班	中国のスポーツ・中国のテーマパークについて	2016/6/28（火）
9	8 班	中国旅行日記	2016/7/1（金）
10	6 班	中国の特徴についてーパクリ・トイレ・美女ー	2016/7/5（火）

4.6.2. 学習者の参加状況に対する 4 段階評価について

今回のプロジェクト型学習では、授業期間の最後に学習者の自己省察を促すため、発表終了後に自己評価を課し、グループ報告書を提出してもらった。以下、自己評価の結果について分析する。

今回のプロジェクト型学習において自己評価は 8 つの項目を盛り込んでいる。なお、クラス I は 59 人、クラスⅡは 58 人の学習者を対象に自己評価を行った。

①～⑦の項目では四段階評価を行い、①「目標文化理解」、②「自文化理解」、③「情報活動」、④「グループへの貢献」、⑤「グループワーク」、⑥「取り組みの姿勢」、⑦「内容と発表」などの達成度を評価した。四段階評価は、「目標以上を達成」4 点、「目標を達成」3 点、「目標達成まであと少し」2 点、「目標達成まで努力が必要」1 点とする[viii]。なお、⑧は自由記述になっている。

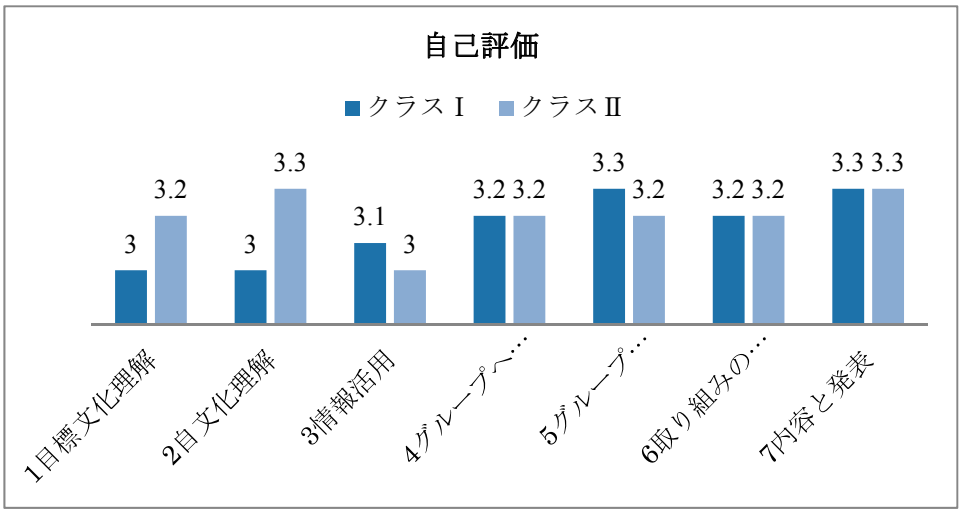

図 4　自己評価による①～⑦項目の回答の平均（小数点 1 位以下切り捨て）

図 4 は、学習者に行った自己評価の①～⑦調査結果を平均したものである。いずれの項目についても「目標達成」の 3 点を超え、全体として肯定的な評価が多く、2 クラスとも今回のプロジェクト型学習において目標達成したと感じたものが多いことがわかる。

4.6.3. 学習者の自由記述について

自己評価の⑧は自由記述問題で、「1. 総合的にみて、授業にプロジェクト型学習「中国について」の導入は教科書中心とする授業と比較して良いと思うのか？」、「2. よかったところ」、「3. 改善の提案」、「4. 最も記憶に残った発表は？その理由は？」という質問を行った。

まず、問⑧-1は2クラスで合計117文の回答中116文の回答が、プロジェクト型学習は教科書中心の授業と比較して良いとなっている。

次ぎに問⑧-2 の記述を分析する。分析方法は、問⑧-2 の 143 文の回答を言及内容によって「授業の感想」、「異文化理解」、「協働力」、「発表」、「自主力」、「その他」など 6 カテゴリーに分けた[ix]。その結果が図 5 である。

図 5 をみると、クラス I の回答で最も記述数が多かったのは、「授業の感想」で、その次ぎは「異文化理解」、「協働力」に関する記述が多かった。クラスⅡの場合は「異文化理解」に関する記述が最も多く、「授業の感想」、「協働力」がその次である。

図 5 の 1～5 の記述例を表 3 に示す。

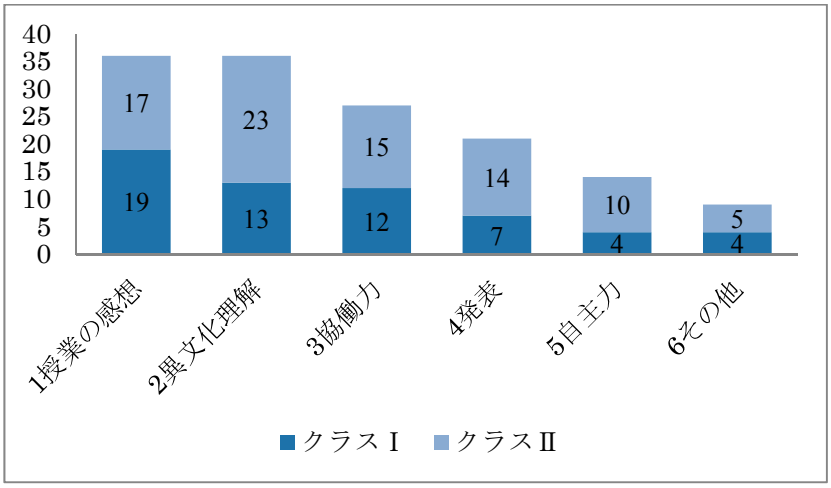

図 5　自由記述の⑧-2 の回答の内容及びその割合

具体的な自由記述の中からは、協力してプロジェクト型学習を推進することに意義を見出したという言及や本プロジェクトの効果についての言及が見られた。全体的に最も記述数が多かったのは、「1. 授業の感想」、「2. 異文化理解」である。

「1. 授業の感想」については、例（1）～（5）のように、「楽しかった」「面白かった」という記述が多かった。例（6）は「中国語を学ぶ興味を増やすきっかけとしてよい」と記述している。つまり、中国語の授業にプロジェクト型学習を導入することによって楽しく学ぶことができたと言える。

表 3　自己評価の自由記述⑧-2 質問による記述例

項目	記述例
1 **授業の感想**	(1)ユーモアがあってよかった。 (2)みんな楽しむことができてより集中するようになり、良いと思った。 (3)楽しく学習できて、時間が経過するのがはやく感じた。 (4)とても楽しい授業で中国語の時間が楽しみだった。 (5)第２外国語ということで距離を置きがちだったが、導入された資料たちのおかげで楽しかったように比較して思う。 (6)　中国語を学ぶ興味を増やすきっかけとしてよいと思う。
2 **異文化理解**	(7)ただ中国語を勉強するだけではなく、中国という国に色々な興味を持てたことで普段の中国語の勉強にも活気が出る。 (8)言語を知る前に、まずその国の文化から知ることができ、言語学習に取り組みやすかった。 (9)中国についての日本で出される記事は、大体かたよったものが多いと気づいた。今では自分の方が良い記事を書けると思う。 (10)中国について自分が知らないところを、多く理解することができ、中国についてイメージが変わったので、教科書中心をする授業と同様に重要であると思いました。 (11)中国について観光、文化など教科書にはあまり載っていないことを深く知ることができること。 (12)さまざまな分野での中国文化と日本文化の相違点を学ぶことができたところ。
3 **協働力**	(13)班の人とお互いに協力しながらするということにおいてコミュニケーションなどの力を発揮できる機会があったこと。 (14)グループの人と交流が持ちやすくなるところ。先生とのコミュニケーションが自然にとれる。 (15)班で協力してパワーポイントを作ったことで、コミュニケーションを取ることができたこと。 (16)チームメンバーと協力してパワーポイントを作成し、共に頑張れたところ。 (17)班内で協力する必要があり、協調性が高まりました。
4 **自主力**	(18)自発的な授業参加という意味でとても良く自分のためにも教養的にとてもためになった。 (19)自分たちでテーマを決めて自主的に調べるのは新鮮で面白かった。 (20)受け身の授業ではなく、実際に参加する能動的学習ができて良かった。 (21)それぞれのグループが自主的に中国について調べるので、受身型の授業にならないところが良い。 (22)自主的に中国について調べるのでより理解が深まるところ。
5 **発表**	(23)情報収集能力やプレゼン能力の向上につながるので良いと思う。 (24)他のグループと違う内容を扱うので、様々なことを知れたからよかった。前で発表するのはこれから必要になるので良い機会だった。 (25)他の班の発表内容が多様だったので色んなことを知ることができた。 (26)それぞれ全然違う内容の発表をしていて新しいことを多く知れた。 (27)それぞれ中国について画像や映像などを多用し、楽しめるようになっていたところ。 (28)他の班の発表のクオリティが高くて驚いた。

「2.異文化理解」については、(7) ～ (8) のように、中国について言葉だけでなく文化について知ることができたという記述や、(9) ～ (11) のように、中国について再認識することができ、中国にイメージが変わったという記述、(12) のように中国文化と日本文化の相違点を学ぶことができたという記述が多かった。したがってほとんどの学習者が今回のプロジェクト型学習は中国を理解するのに役に立ったと認識しているとみてよいだろう。

そして「3. 協働力」については、(13) ～ (17) のようにグループで協働することによる良さに関する記述が多かった。また (14) のようにグループメンバーだけではなく、教師とのコミュニケーションが自然にとれるという記述もあった。

「4. 自主力」については、(18) ～ (22) のように能動的に学習することによるメリットに関する記述や、体験後の感想についての記述もよく見られた。

「5. 発表」については、(23) ～ (24) のように、情報収集能力やプレゼンテーション能力の向上につながるという記述があった。さらに (24) ～ (28) のように、ほかのグループの発表に驚いたことや学んだことについての記述も多く見られた。

最後に、問⑧-3 の改善点については、「もう少し授業内で打ち合わせの時間がほしかった」、「ある程度方向性の指定がほしかった」、「グループの人数を減らす」などの記述があった。

クラスⅠとクラスⅡを比較してみると、クラスの雰囲気の違いによって、回答数や順位が多少異なっていても言及している内容はほぼ同様である。今回の記述例の分析から分かったことは、プロジェクト型学習を体験したことによって、学習者の中国語及び中国の文化に関する理解が深まり、認識が変わったことが窺えた。また「協働力」、「自主力」、「プレゼン能力」向上の必要性に気づき、実際に体験したことで、自信を得たと考えられる。

5. 今回のプロジェクト型学習の効果について

①中国に対する理解・認識の変容

課題決定の段階では中国について悪いイメージを持っている学習者が多かったが、調べていくうちに印象が変わっていた。例えば、「中国と日本の違いについて調べていくうちに、私たち日本人が持っている偏見に気づき反省すると共に発表を通じてそのことを伝えたいと思った」、「中国について自分が知らないところを、多く理解することができ、中国についてイメージが変わった」、「中国についての日本で出される記事は、大体かたよったものが多いと気づいた。今では自分の方が良い記事を書けると思う」などの記述から、中国文化に対して関心や問題意識を持ち、複眼的な視点から捉え、中国についての認識が変わったと言える。また、「さまざまな分野での中国文化と日本文化の相違点を学ぶことができた」、「自分たちの文化との比較ができてよかった」など、中国と日本の文化との共通点や相違点を整理した上で、日本の文化を再認識することができたと考えられる。

②協働的・能動的な活動の効果

今回の取り組みでは、「チームメンバーと協力してパワーポイントを作成し、共に頑張れた」、「班

内で協力する必要があり、協調性が高まった」、「自発的な授業参加という意味でとても良く自分のためにも教養的にとてもためになった」、「受け身の授業ではなく、実際に参加する能動的学習ができて良かった」、「それぞれのグループが自主的に中国について調べるので、受身型の授業にならないところが良いと思う」、「自分たちでテーマを決めて自主的に調べるのは新鮮で面白かった」など、協働的・能動的な活動についての感想が寄せられた。このように、学習者は能動的な学びの中で仲間とともにそれを楽しみながらできたということと、受け身の授業ではなく、能動的な学習が体験できたと言える。

③他のグループからの学び

プロジェクト型学習の場合、グループ内の話し合いで異なる考え方を受け入れ、その多様性や個別性の大切さに気付くだけではなく、他のグループの発表からも刺激を受けることができる。今回の取り組みでは、「他の班の発表内容が多様だったので色んなことを知ることができた」、「それぞれ全然違う内容の発表をしていて新しいことを多く知れた」、「他の班の発表のクオリティが高くて驚いた」などがその例である。

こうした感想から同じグループのメンバーだけではなく、他のグループのプレゼンテーションに対する関心も高く、他のグループの成果を通し、さまざまな学びが起きていることが分かる。

④プロジェクト型学習と教科書学習との関係

今回の能動的な学習の中では、主体的に考え、プロジェクトを進めていくうちに疑問点を発見したり、それを解決したりしていった様子が窺える。なお、このようなグループで協力し合って学んでいくという態度は、学生の教科書学習への取り組みにも変化をもたらした。例えば、普段の音読や文法などの学習にも、グループでの協働的・能動的な学習態度が見られた。

また、「言語を知る前に、まずその国の文化から知ることができ、言語学習に取り組みやすかった」、「中国について観光、文化など教科書にはあまり載っていないことを深く知ることができる」などの記述から今回のプロジェクト型学習の取り組みは教科書学習の導入にもなったし、補助的役割も果たしていたと考えられる。

⑤教師の役割について

今回のプロジェクト型学習において教師は、考えや知識を学生へ教え込むのではなく、その活動を見守り、学生が安心して試行錯誤ができるような場を作ろうと努めた。しかし、「教えない」からと言って放任ではない、学習者に「気づかせる」ことである。

今回のプロジェクト型学習を通じて学んだことは、教師の万全の事前計画と準備がなければ、学習者の協働的・能動的な学習は不可能であること、また共に学ぶ、或いは学習者のプロジェクトから学ぶという考えを持つことが大事だということである。

6. おわりに

以上、2016年度九州大学で実施した中国語Ⅰの授業におけるプロジェクト型学習を振り返り、その結果について述べた。

初修中国語授業におけるプロジェクト学習では、学習者が中国語に関する十分な知識を持っていないため、この段階での中国語の授業をプロジェクト型学習中心に組み立てるのは無理があるし、学習者に中国語でプレゼンテーションをさせるのは難易度が高すぎる。

高島[3]が指摘したように、言語活動の全てをプロジェクト学習などの「タスク」によって構成するのではなく、通常行われている教科書を中心とした授業に加えてタスクの力を借りるという考え方がより現実である。

以上のような問題点を踏まえ、今回のプロジェクト型学習は、教科書を用いた授業とプロジェクト型学習を関連づけることで、中国に関する理解を深め、意識の変容を促し、学習意欲が喚起されるなど、学習面でも効果があったことが考えられる。また今後の中国語学習意欲を促し、学習の継続を促す契機となるものと思われる。

註

i 「学士力」：文部科学省・中央教育審議会大学分科会「学士課程教育の構築へ向けて（審議のまとめ）」http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212958_001.pdf （2008年3月25日発行）（2016年8月2日検索）
「社会人基礎力」：経済産業省「『社会人基礎力に関する研究会』中間取りまとめ http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/chukanhon.pdf （2006年1月20日発行）（2016年8月2日検索）
「21 世紀型スキル」：「21 世紀型スキルのためのパートナーシップ P21」で提唱されている。http://www.atc21s.org/（2016年8月2日検索）

ii 「アクティブ・ラーナーへの第一歩 2016年度入学者用～基幹教育攻略ガイド～」九州大学基幹教育院の内容を参考したものである。

iii 同志社大学PBL推進支援センターhttp://ppsc.doshisha.ac.jp/reference_data/data.htmlの記述をまとめた。（2016年8月3日検索）。

iv クラスⅠは、毎週火曜日2限目、金曜日2限目の授業で、クラスⅡは、毎週火曜日3限目、金曜日3限目の授業である。

v 本学の中国語Ⅰの教科書は、相原茂・陳淑梅・飯田敦子（2011）『メディア版　一年生のころ』（朝日出版社）である。

vi 文部科学省先導的ITスペシャリスト育成推進プログラム「PBL（Project Based Learning）型授業実施におけるノウハウ集」http://grace-center.jp/wp-content/uploads/2012/05/pblknowhow20110726.pdf（2016年8月3日検索）。

vii 文部科学省先導的ITスペシャリスト育成推進プログラム「PBL（Project Based Learning）型授業実施におけるノウハウ集」http://grace-center.jp/wp-content/uploads/2012/05/pblknowhow20110726.pdf（2016年8月3日検索）。

viii 1文の中に複数の視点が混ざっているものは、複数のカテゴリーに入れ、カウントした。

参考文献

[1] 會澤まりえ（2015）「授業として行うプロジェクト型学習とコミュニケーション教育」尚絅学院大学紀要 Vol.69、pp.81-97
[2] 鈴木敏恵（2013）『問題解決力と理論思考力が身につくプロジェクト学習の基本と手法』教育出版社
[3] 高島英幸（2005）『文法項目別英語のタスク活動とタスクー34 の実践と評価』大修館書店
[4] 玉木佳代子（2009）「外国語学習におけるプロジェクト授業―その理論と実践―」立命館言語文化研究 Vol.22、pp.231-246
[5] 寺西光輝（2015）「中国語入門教育におけるアクティブ・ラーニングの可能性―中国人留学生を TA として活用したマニュアル作りの実践―」椙山女学園大学教育学部紀要 Vol.8、pp.193-206
[6] 當作靖彦・中野佳代子（2013）『外国語学習のめやす　高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』公益財団法人国際文化フォーラム
[7] 西村月満（2012）「プロジェクト課題による大学英語教育：その背景と実践」北里大学一般教育紀要 Vol.7、pp.1-21

資料 1　「グループによる報告書」

2016 年中国語 I プロジェクト型学習報告書	
グループメンバー：	
発表日時：　　年　　月　　日	
話題分野：	
1.課題設定	
2.計画	
3.調査	

4.考察	
5.発表	
6.評価	
7.感想	

資料 2 「自己評価表」

	評価項目	4	3	2	1
目標文化への興味・関心	① 目標文化や事情に関して問題意識・視点	□目標文化に対して関心や問題意識を持ち、興味のある課題や話題を決め、複眼的な視点から捉え、気づきと発見の旅をすることができる。	□目標文化に対して関心や問題意識を持ち、興味のある課題や話題を決め、複眼的な視点から迫ろうとしている。	□目標文化に対して関心や問題意識を持ち、興味のある課題や話題を決める。	□目標文化に対して関心を抱こうとしている。
	② 目標文化の理解と自文化の再認識	□目標文化と自文化との共通点や相違点を整理した上で、その背景について多角的分析することができ、自文化を再認識することができる。	□目標文化と自文化との共通点や相違点を整理した上で、その背景について推測することができる。	□目標文化と自文化を比較しながら共通性や相違点を発見しようとしている。	□目標文化に興味を持ち、不思議なところなどを指摘することができる。

情報の活用	③ プロジェクトの準備と情報収集	□必要な語彙、文化知識、背景知識を確認し、万全に準備をする。集めた情報を整理分析し、オリジナリティーのあるものにデザインできる。	□必要な語彙、文化知識、背景知識を確認して、ある程度準備をする。集めた情報を整理し、ある程度創造的なものにデザインできる。	□必要な文化知識、背景知識を確認して準備し、集めた情報を整理し、ほぼデザインできたが、問題がある場合もある。	□関連する情報を少し集めて分析せず、ほぼそのまま使い、問題が多い。
協働力	④ グループへの参加	□真のグループメンバーであり、目標達成のために努力し、ほかのメンバーをサポートしている。	□グループの目標達成のために努力している強いグループメンバーである。	□グループの目標達成のために必要なグループメンバーである。	□時としてグループメンバーとして参加していない。
	⑤ グループワーク	□グループの目標を達成するために常に努力し、ポジティブであり、他人への協力を惜しまないし、グループのために自分の能力、知識、時間などを常に提供し、目標達成のために与えられた以上の仕事をする。	□グループの目標を達成するためにおおむね努力し、他人と協働作業することにおおむねポジティブである。グループのために自分の能力、知識、時間などを提供することが多く、自分に与えられた仕事をおおむね終える。	□グループの目標を達成するために他人を助けることもあり、グループのために自分の能力、知識、時間などをときどき提供する。与えられた仕事をしないことも時々ある。	□グループでする作業、グループメンバーに批判的で、与えられた仕事をせず、グループへの貢献もほとんどない。
	⑥ 取り組みと姿勢	□話し合いでの発話が多く、自分が発見したことや気づいたことについて説明し、また、ほかの人の意見や考えもよく聞いている。さらに異なる立場や考え方を受け入れ、その多様性や個別性の大切さに気付く。	□話し合いでの発言が多く、自分が発見したことや気づいたことについて説明しようとしている。また、ほかの人の意見や考え方をよく聞いて、自分と異なる意見を受け入れようとしている。	□話し合いで自分の意見を述べることはでき、ほかの人の意見にも反応しているが、自分と異なる立場や考え方を自分の中に取り込もうとしていない。	□話し合いの中でほかの人の意見を聞くだけで、自分から積極的に話し合いにかかわろうとしていない。
構成・内容	⑦ 内容に関する知識と発表の分かりやすさ	□発表の内容に関する知識が十分あり、ビジュアルエイドを非常に効果的に使い、聴衆の興味を引く順番で提示し、発表を	□発表の内容をよくおさえており、ビジュアルエイドを適切に使い、聴衆のわかりやすさを考慮している。	□発表の内容に十分知識を持っていないため、説明がよくできていない。時々ビジュアルエ	□発表の内容をほとんど把握していないため、発表の内容に大きな問題がある。まったくビジ

		非常に分かりやすいものにしている。		イドを使うが、発表のないようを助けるものではない。	ュアルエイドを使わない。

⑧自由記述

1. 総合的にみて、授業にプロジェクト型学習「中国について」の導入は教科書中心とする授業と比較して良いと思いますか？

2. よかったところ

3. 改善の提案

4. 最も記憶に残った発表は？その理由は？

5. その他

参照；當作・中野[6]